

---

# 歌の力～混沌に咲く絆（はな）～

洒落頭社

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

歌の力ゝ混沌に咲く絆<sup>はな</sup>

### 【Nコード】

N9099W

### 【作者名】

洒落頭社

### 【あらすじ】

特殊な血統により、特殊な力を使える家族がいた。

それは歌うことで、そこに込められた詞<sup>ことば</sup>を現実世界に反映できるというもの。

それはとても素敵な　とても危うい異能。

これは歌を巡る家族の、葛藤や衝突、そして絆を綴った物語である。

## 登場人物紹介

物語の第16部分までで、登場人物が出揃ったので、紹介しておこうと思います。

またこの情報は、話が進み次第、随時更新していきます。

なお、未読の方は、ネタバレが多分に含むことを理解した上でお読みください。

後、記述の都合上、第16部までで触れられてない内容もちよこつと述べます。

なので、読んだ方にも若干のネタバレがあることを予めご了承ください（第16部まで読んでくださった方にとつては、そこまで問題はありませんが、ネタバレなんて嫌だ！ という方は読まないことを推奨します）。

## 登場人物紹介

かとうなづか  
加籐夏華：

本作の主人公であり美少女<sup>ヒロイン</sup>。愛称は、「夏」。

潔癖症でやることなすこと、完璧にこなさなくちゃ我慢ならない性格。なのでバラバラになった今の家族に、多大な不満を抱いている。兄には秘密にしているが、禁じられた異能の力（歌うことで、そこに込められた詞<sup>詞</sup>を現実<sup>現実</sup>に反映させられる力）を使い、東京スカイツリーを崩落させた張本人でもある。

加藤冬治かとうふゆぢ：

夏華の兄。妹とは違い、豪快な性格で、一家の長として家族を支えている。

また、家族のことを一番に考えすぎるせいで、自分のことを等閑なおよにしやすい。それ故、美男イケメンでありながら、女性にふられることが多々ある。

過去に、歌に関わる仕事をやっていた形跡あり。

加藤千己かとうちぎ：

夏華の弟であり、冬治の弟でもある。つまりは末っ子故、甘やかされて育てられてきた。

その反動なのか、結果なのか、どうすれば怒られないかをよく知っている。

また、ゲームや漫画といった、二次元のことを愛でる厨二病な少年。それが災いして、身内によく迷惑をかけている。

ただ、それが高じて、機械関係にはめっぽう強い。

戸籍上、夏華や冬治とは血縁関係があることになってるが、実際には血の繋がりはない。

従って、千己にとって夏華は義姉にあたり、冬治は義兄にあたる。

加藤美麗かとうみれい：

夏華の姉にして、暴力団組織　白道会はくどうかいの会長。

非常に頭の回る性格で、人を出し抜くことに長けている。

戸籍上、夏華や冬治とは血縁関係があることになってるが、実際には血の繋がりは無い。

従って、美麗にとつて夏華は義妹にあたり、冬治は義兄にあたる。

ただ、千己とは血が繋がっており、実姉である。

華道花かどうはな：

夏華と冬治の実母にして、東関東最大の暴力団組織　華道会かどうかいの会長。

近藤こんどう：

東関東最大の暴力団組織　華道会かどうかいの若頭。つまり、組織におけるナンバー2の実力者にあたる。

## 登場人物紹介（後書き）

舞台設定（華道会や白道会など）については、後日追記します。

## 舞台設定

今度は舞台設定について、詳細を記述していきます（あくまで第16部分までです）。

物語が進むにつれ、こちらでも更新していきます。

以下、ネタバレを含みます。

載せてる第16部まで読み切っていない方は、そのことを予めご了承ください。

また、記述の都合上、第16部までで触れてない所もちよこつと出てきます。

読まれる方は、そのことも予めご了承ください。

## 舞台設定

華道会：  
かどうかい

東関東最大の暴力団組織。

白道会：  
はくどうかい

東京都心に拠点を置く、一暴力団組織。

華道会との対決姿勢を鮮明に出してる、数少ない組織でもある。

先の東京スカイツリー崩落事件で、犠牲になったのが同組員だったこともあり、現在は騒然としている。

歌族<sup>かぞく</sup>：

古くから華道家に脈々と受け継がれる、特殊な血統を持つ家系のこと。それは歌うことで、そこに込められた詞を現実に反映させられるという、異能が揮える家族だった。

現状、この力を使えるのは、華道会の会長　華道花と<sup>かとうはな</sup>、その息子の冬冶<sup>とうや</sup>、他には夏華<sup>なつか</sup>の三人だけである。

ただ、二〇歳<sup>はたち</sup>までは、歌うことは厳禁とする掟がある為、夏華はしてはいけないことになっていた。

申刻<sup>まいるごけ</sup>の縛<sup>はく</sup>：

詳細は、今の所不明。



## 序章 勸善懲惡「東京スカイツリー」（前書き）

初めまして、読者様！

この度、「小説家になろう」に初投稿いたしました。

何分、若輩者でドキドキですが、今作に少しでも付き合ってください、幸いです。

まだ序章ですが、一週間に二〜四回は更新していこうと思って  
おります（できるかな〜）。

途中までも結構ですので、ぜひ何らかの形で感想を頂ければ至上の喜びです（忌憚ないご意見、お待ちしております！）。

## 序章 勸善懲惡【東京スカイツリー】

### 序章 勸善懲惡

某日 深夜 東京スカイツリー外縁

その日、携帯 タッチパネル式の液晶画面が、持ち主を死に追いやっていた。

その男は、真冬だというのに玉の汗をかいている。かけ上がる度、その雫が階下に落ちていった。力む両足は震え、足元が覚束ない。それでも、逃げるのをやめはしない。

思わずのけ反るほど、吹きつける強風が男の進行を妨げた。踏ん張りを利かせようするが、よろめいてしまう。何度、落ちる！？と思ったことだろう。もし手すりが無かったらと、考える度ゾツとする。

この階段は、螺旋構造だった。巨大な電波塔を、ぐるぐる巻きに何周も回ってできている。その建物の高さは六三四メートル。つまり、足で上るのは考えられない高さだった。なのに男は駆け上がる。なのに男は上っていく。その無謀とも言える高度を。

理由は決まっていた。ここからなら、死ねるからだ。現に男は自殺すべく自殺できる高さまで向い、そこでお終りにしようと思っていた。

なのにできない。できなかった。恐くて……たまらなかった。何度も覚悟はした。諦めもした。けれどもそれ以上に、生きたかった。それだけのことで、それだけのことで、ほんのわずかな奇跡に縋る。

気づけば長時間かけ、到達する。てっぺん　展望室前へと。

同時に男は、うつ伏せで崩れ落ち、倒れこんだ。その拍子に顔を打ち、目眩を起こす。肩で息をしていた。吐く息は白い靄となって左右に四散し、儚げに消えていく。突っ伏した背中からは、湯気がゆらゆら立ち上っていた。ふくらはぎはパンパンに膨れ上がり、足裏には激痛が走っている。一休みしたことで気づかされる、疲労困ぱい。もう一步も動けそうにない。痛い。痛くてたまらない。

もう後はここでじっとしていれば、何とかなるんじゃないだろうか？

それ以前に、持つてる携帯を空に投げ捨てれば、この状況から救われるのでは？

（どうして……どうして！！）

男には分かっていた。その何れの問いかけも、こちらの願望ではないことを。

（何で俺が……俺が一体何したっていうんだ！！）

ふらついた足取りで、何とか手を付き、立ち上がる。再度、痛みが走った。堪えきれず倒れそうになった所を、何かに支えられる。

扉だ。

そのドアノブを回そうとする。が、涙のせいで、うまく取っ手を掴めない。やおら乱暴に扱い、思い切り引つ張った。すると、開くはずの扉がガチリと、鈍い金属音を響かせ止まった。

そこには、鍵がかけられていた。扉の上部には『スタッフ専用出入口』と、そう言付けがされている。

男は着こなした警備服、その胸ポケットに手を入れ、鍵を取り出す。胸元には、かけられた名札があるが、そこに男の本名は無い。つまりは、偽名。

男は扉の鍵を開け、中へと入ったのだった。

内部の光景は真つ暗の一言で、『非常口』と書かれた四角、その

緑だけが淡い光を放っている。加えて、営業時間外ならではの静けさ。さつきまでが強風の音やら、甲高い足音やらで騒がしかった分、より際立って感じられた。

暗闇と沈黙の中、男は徐々に落ちつきを取り戻していく。余計な汗を手で拭い、被っていた帽子を取った。

頭わになった顔面は、とても警備員向きではなかった。強面で厳しい、中年男性。明らかに極道そのを踏んだ過去のある顔つきである。

男は、恐る恐るといった感じで、今度はズボンのポケットに手を入れた。感じたのは、過度の熱さ。その熱源を震えながらも驚掴むと、外に取り出す。

それは最新の、タッチパネル式の携帯電話だった。

そして、薄目ながら見た液晶画面は、真っ黒だった。

「は……ははは」

電源が勝手に落ちていた。つまりは、バッテリー切れ。だから、もうお終い。助かったのだ。

チャリラリラーン

「！」

その時、儚い願望を打ち砕く、絶望の旋律イントロが奏でられる。場違いに陽気な、だからこそその不気味なサウンド。音源は電源を切ったはずの、この建物内のスピーカーから。最大限まで、音量ボリュームが引き上げられている。

「ひぎいっ！？」

まだ何もされてないというのに、された後のような奇声を上げる男。経験からくる、条件反射のようなものだった。

散々に打ちのめされてきたのだ。この、詞うたに。

それは音痴な歌声　あんまりな女声だった。

？ 始まりの歌　五線譜じゃ伝わらない　十八番ナンバー

でかけましょう　世界を君色に塗り変えてこう？

Aメロが、男を発狂させる。

？でかけましよう？で、何故か自身の体が浮き上がり、横へなぎ飛ばされる。窓をがち割り、夜空へと。

粉々のガラス片と共に、闇に投げ出された男は、血まみれだった。肌に刻まれた切り傷、そこから零れる生血より早く、この身は落ちてゆく。

凄まじい速度に、荒れ狂う風。体は否応なく振り回される。まるで糸の切れた人形の如く、為すすべなく踊らされた。

冬空に、揺らめく人体が映えていく。

が、これで終わりではなかった。

再び、男は建物に引き寄せられる。重力を無視した、圧倒的な引力。

同じように窓ごとがち割り、中へと転がされた。

飛び散るガラス片が、その勢いの凄惨を物語っている。転がって落ちた男は、その先で深い血溜まりを作っていた。

ここはさっきまでいた第二展望台でなく、その下部にあたる第一展望台。その、無音の空間では、荒々しい息遣いだけが反響していた。

「うあ……くっ……」

呻き声は意味をなさない。伝わるのは、どうしようもない悲哀。

苦渋の語感に包まれていた。

（どうして……どうして！！）

叫びたい。喚きたい。けれども口が、動かなかった。ただ熱い。

唇だけじゃない。顔も首も胸も腰も足も。熱い。熱くてたまらない。微動だにしない、うつ伏せの五体。その壊れた瞳は、ある文明の利器を見つめていた。

携帯電話。その持ち主と同じく、傷だらけの。

もう動かないと見られる、そんな傷物の画面を見るにつけ、男は

目を疑った。

（光って、る？）

電源が入れられたのだ。バッテリー切れの携帯に。  
ありえない現実に、ありえないこの仕打ち。

気づけば、Ｂメモが終わる所だった。

「は……ははは」

喉の奥からくつくつと、苦しそうな引き笑いをする。それは、さきほどの安堵からくる笑いとは全くの別物。死を悟った人間が最後に見せる、あの世への笑みに近いものがあった。異なる点があるとすればそれは、男が泣き笑いしているということ。足掻くことを諦め、それでも生きたいと思ってしまうっている。願ってしまうのだ。そんな、板ばさみの自嘲。どうしようもなく切ない、生死の葛藤がそこにはある。

（これも あれ 詞がやったんだ）

間違いない。この携帯の非現実さは、Ｂメモが起こしている。そして、その画面には身の毛もよだつ四文字が並べ立てられていた。

『勸善懲惡』

そして、着メロが流れる。携帯特有のサビから始まる楽曲。それは、場内のスピーカーとハモリ合い、混じり合って調和を利かせる。（助けてくれ頼む助けてくれよちくしょおおおおおおおおお  
おおお！！）

サビが歌い終わると同時、横一線の何かが、男の目線を横切った。  
響くのはキーンという耳鳴り。

そして、日本最大の電波塔は真つ二つに裂けた。

出来上がったのは台形と、地に突き刺さる逆三角形。非現実的な  
光景がまた一つ、都会の夜景に映えていったのだった。

**序章 勸善懲惡【東京スカイツリー】（後書き）**

次回作は、明日を予定しております。

## 序章 勸善懲惡【テレビ中継】（前書き）

今回は、視点が警備員からある人物へ。  
実はこの人物こそ本作の……



## 序章 勸善懲惡【テレビ中継】

『たった今緊急速報が入りました！ 東京都墨田区押上にある日本最大の電波塔、東京スカイツリーが真つ二つに切り離され、その上部にあたる先端が、六号向島線の路面に突き刺さっているとのこと！ 繰り返します。たった今 』

部屋にあるテレビ、その画面内では、『緊急速報』とのテロップと共に忙しく番組が変更されていく。

女は、手に取ったりリモコンをその騒がしさに合わせ、チャンネルを変えた。が、ある局では生中継を、また他局ではその道の専門家を招いての実況見分をと、やってることは変わらない。

どこもかしこも、うるさい。女は、その元凶にチャンネルを合わせると、終に電源を落としたのだった。その後、ため息をつく。

吐息で震えた唇には、艶やかな紅のルージュが塗られていた。摩く黒髪に、ファンデーションやらマスカラやらで整えられた顔つき。齢の割には背伸びした、そんな色香を漂わせていた。

チャリラリラン

馴染みの着メロ（イントロ）が聞こえる。それは、大好きな人の歌。

女は携帯を手にとると、通話ボタンをプッシュする。その後、それを耳に当て、声を発する。「もしもし」でない第一声を。

「説明はいらない。もう、ニュースで知った」

と結論だけを告げる。相手からの音声はない。沈黙が、場を支配した。

ややもして、プツツという音が聞こえる。電話が切れたのだろう。「これで……やっと始められる」

女は徐に立ち上がると、扉を開け、風呂場へと向った。その後、

脱衣所にて洋服を脱ぎ、装飾品を外して生まれたままの姿になる。

その裸は、玉肌だった。まるで女神の彫刻を思わせるかのような均整の取れた美。女性の象徴でもある二つのふくらみは、申し分ないたおやかさだった。

女は風呂場の電気をつけ、その中へと入る。次にカランを回し、シャワーを浴びた。その際、思わず口ずさまれた鼻歌。

その声色は、あの東京スカイツリー内で響いた音痴な  
たてもの あんまりな女声そのものだった。

ややもして、女は風呂から上がると、寝支度に入る。持ってきたタオルケットを手に取り、まずは体を拭いていった。すぐそばには、洗面所。

女は桃色の可愛らしいネグリジエに着替えると、今度はそこで濡れた長髪を乾かす。芳香性の強いシャンプーを使ってるせいか、ドライヤーの風と共に、椿の香りが鼻腔をくすぐった。鏡に映る風呂上がりの、くったりした顔。そこには、妙な艶っぽさが醸しだされていた。

そうして髪を乾かしきつたら、後にやるのは決まりごと。歯を磨き口を濯ぐ。ただそれだけ。

口内をすっきりさせると、女は床につくべく、自分の部屋に戻った。薄暗く、冷えた廊下を歩きながらも、手持ちの保湿用クリームを肌にこすりつける。感じるのはヌルツとした感触と、ヒヤツとした冷たさ。辺りがぼんやりしているので分らないが、きっと光沢ある、てかてかの肌になってることであろう。

そんな、何でもないことを思ってる最中、それ異変は起こった。どこからか声が漏れ聞こえてきたのだ。

それは、女性の色っぽい嬌声。音源は自分の部屋のすぐ隣。もっと正確を期せば、そこにあるもう一つの部屋、その扉を隔てて向こう側から。

いつものことだった。

なので女は気にせず、自分の部屋への扉を開ける。重い足取りそのままに、ベッドに腰をかけると、枕元に置かれた携帯　タッチパネル式の液晶画面を操作した。そこでやるのは、決まりごと。朝の目覚まし、アラームの設定だった。

一通りすべきことを終わらせると、つけっ放しだった電気を消す。と同時に、暗闇が部屋中を満たした。女は慣れた足取りで、布団へに入る。

布団に包まれた、温いベッドの中。

なのに、女は寒かった。真冬だからではない。無論、季節ならではの寒さに両手両足を冷えきっている。すぐには寝つけそうにない。両耳が冷たく、思わず顔まで掛け布団を引き上げてしまう。が、そうではない。問題は、その寒さではないのだ。

悪寒。

実の所、女が苛まれてるのは、この類の寒さだった。

（　　とうとう、やったんだ）

静寂の中、とうとう今日のことが反省されてしまう。見て見ぬふりなど、できようがなかったのだ。

遂に、罪を犯した。取り返しのつかない大罪。

背負ったものの重たさに、心が押しつぶされそうになる。知らず震える手で、震える自身を抱きこむ。

それでも、やめない。やめてはけない。

必要だからだ。必要悪。

それでも、けれども、

（……………苦しい）

女は胸に手を当て、目一杯握り締める。掴まれた、何でもない痛みに泣きそうだった。堪らずベッドの端、そこにぴたりとくっつけられた壁へと、体をすり寄せる。その壁を隔てた向こう側には、さっき聞いた嬌声が、今もなお鳴り響いていた。

「……………」

目をつぶり、耳を済ませることで聞こえる、もう一つの声色。

それは、大好きな兄<sup>ひと</sup>の声。

その声が聞けただけで、女には十分だった。彼がいる。それはもう、どうしようもない安心感だった。悪寒も、痛みも、罪も、その重みも　その全てから、守られる。守ってくれるという絶対的な関係。それが、この家族のあり方。

とはいえ、この冷え冷えの体感である。すぐには寝つけない。まどろみに落ちゆくまでの数十分。もどかしくはあった。寒気もした。それでも、

「……………」

やっぱり怖いことなど、何一つとしてなかったのであった。

## 序章 勸善懲惡【テレビ中継】（後書き）

次回作は、明日投稿しようと思ってます。どうぞよろしくお願いいたします。

## 第一章 不確かな真実（うた）【始まりの朝】（前書き）

物語の始まり。さつき罪を犯した女性が実は……

## 第一章 不確かな真実（うた）【始まりの朝】

朝っぱらから、それは起こった。

目覚ましのアラーム　その着メロが、頭にガツンと響いてくる。すかさずピツと、それを一音で止めた。動きに無駄がない、一瞬の出来事。必要最低限の情報で、事なきを終えるあたり、その潔癖さが垣間見える。

と、いうより、女はそもそもが潔癖症だった。それも極度の。本人はそれほどでないと思ってるが、周りから言わせるとそうだった。「うーん」

気だるそうに上体を上げると、眠気眼をいくらかこする。愛らしいその仕草は、男性陣が色めき立ちそうな可憐さが窺える。女は、こすっていた手を持ち上げると、ゆっくり背伸びをした。気持ちよさに、変なヘタレ声を上げてしまう。

「ふわあああ」

自然とでる大きなあくび。その開かれた大口を、女は咄嗟に手で隠す。恥じらいは、どんな時でも忘れない。

起き上がるとベッドを這い出し、窓側に向かった。

後、カーテンを掴むと、横に押し広げる。当然の如く、部屋に差し込む陽光。覚悟してたものの、眩しさに目はしばたたかれる。

けれども、おかげで室内が明るくなった。カーペットでは所々に陽だまりが、揺れてはたゆたっている。

「……………よし！」

女は気合を入れた。それは別に、これから今日も頑張るぞ、というような呑気なものではなく、自己暗示のようなもの。自分に言い聞かせてるのだ。なぜなら、ここからは別人になるのだから。罪を犯した女ではなく、一家族の妹　加藤夏華<sup>かとうなつか</sup>として。

夏華はこれから会おうとする人に、話せないでいたのだった。自

分が、罪人であることを。

だから演じなければいけない。こなさなければいけない。いつも通りを。これまでもそれで通してきた。だから大丈夫。

夏華は一度、両頬をぱんつと叩くと扉に向かった。ためらいなくその取っ手を掴み、捻ると押し開ける。勢いで廊下を半円に回ると、すぐ隣の扉を先と同じく押し開ける。

そして、機械的に開けた先　ベッドには、裸の二人が寝そべっていたのだった。

加えて、カーテンの隙間からの木漏れ日が、川の字の二人を照らしている。つんと鼻をつくのは、雄雌の動物的な匂い。劣情の余韻からくるそれは、まぐわいあってこそ、そんな情景で満たされていた。

いつものこと。

毎度のことなので驚きもしない。初見ではさすがに、とんでもない反応をしてしまったが、もう慣れてしまった。

初めにこれを目にしたのはそう、中学一年生の夏、八月一四日の二三時二〇分、一階の居間でであった。喉が渴いたと思って起きてしまったのが、運の尽き。当時、思春期真っ盛りの夏華にとって、その情景は衝撃的だったしかいいようがない。顔を赤らめ「ご、ごごめんなひやいつ！」なんて言ってた初心な自分がそこにはあった。

とはいえ、今ではもう高校生のご身分。あの時のことは人生の恥ずかしい汚点として、懐かしむ程度のものになっていた。

相手の女性は、初めて見る顔だった。年齢は、二〇代後半くらい。セミロングの髪を少しカールさせることで、愛らしさを演出している。それは強気で、どちらかというと男勝りな顔つきとはギャップがあり、だからこそ魅力的だった。細身の体にはシミ一つなく、す



らつとした脚には、自然と目がいつてしまう美しさがある。

可愛いというよりは格好いい。

可愛いというよりは綺麗。

女っぽいというよりは男っぽい。

実の所、兄が付き合う女性は皆、この三条件に当てはまる人ばかりであつた。

（これで何十人目、いや、もう一〇〇人は超えてるのかな？）

もうこの女性で何人目になるか、分からない。そのくらいに遊び人な彼。

夏華は、その家族に第一声を発する。朝の挨拶を。

「おはようございます、兄さん……………冬治兄さん！」

その一声に兄 加藤冬治は、案の定起きやしない。三〇代そのままに、豪快ないびきをしていた。暑苦しくない程度の短髪に、精悍な顔立ち。腹筋は割れ、とはいえマツチョとは違う、いわゆる女性好みの筋肉美を備えた体つきだった。イケメンという言葉がぴつたりな、そんなビジュアル。兄妹揃つてのこの端整さは、遺伝故の、そんな生来のものがあつた。

「起きてください。朝ですよ。起きてください」

ニワトリのようにベッドの周りを行ったり来たりし、同じ言葉を繰り返す。正直、肩を揺すれば起きるだろうが如何せん、今の兄は不潔だ。潔癖症の妹としては、触れることに比類なき抵抗を覚える。どうすべきかと悶々してる内、ふと視界の片隅に馴染みの物体をとらえた。

アコースティックギター。

弾き方など一切知らないが、これが楽器だということぐらいは分かる。つまり、音が鳴るもの。

夏華は、壁に立てかけられたその楽器のヘッドを掴むと、一気に一弦から六弦までかき鳴らした。

途端、ベッド上に二つの裸体が跳ね上がる。

「どつちやら起きたようだ。夏華は、改めて言い直す。  
「おはようございます、兄さん」

**第一章 不確かな真実（うた）【始まりの朝】（後書き）**

次回作は明日を予定しております。

第一章 不確かな真実（うた）【兄妹で和気藹々】（前書き）

兄妹揃った朝。徐々に二人の仲が明らかになって……

## 第一章 不確かな真実（うた）【兄妹で和氣藹々】

「何だ何だ何だ何だ!？」

と、騒ぐ兄。さすが音楽（うた）に関しては、反応の早いこと。一方、相手方の女性は、布団を引き寄せては体を隠していた。

どちらも、こちらに気づいてる様子はない。なので身を乗り出し、顔を見せてみた。満面の笑みを。

「朝ですよ。起きてください」

「あれ、夏（なつ）? お前どうして」

夏華を「夏」の愛称で呼ぶ、冬冶。疑問に思うのも無理はない。だって、彼の中での妹は今、友達の家でお泊りなのだから。

「さつき帰ってきたばかりなんです」

夏華は口ごもらず、平然と言つてのける。真つ赤な嘘だった。

「そつかあ……朝ごはんは?」

と喋る冬冶は気だるそうだった。寝癖がついたままの頭を掻いている。

「食べてません」

「ん。分かった。ちと下で待つてろ。すぐ用意する」

必要最低限の情報を交わすと、夏華は向きを翻した。廊下へと。一瞬、相手方の女性と目が合った。合わせるつもりはなかったのだが、あまりにもこっちを見るものだから、罪悪感に駆られてしまった。きつと彼女からすれば、「この子、妹さん?」からの「どうも初めまして」を言いたいのだろう。これまで幾度となく繰り返されてきたのだ。それくらいは分かる。

とはいえ、夏華は会釈も挨拶もしなかった。それは、別に兄妹愛（ブラコン）とか家族愛とかそういう感情からではない。単純に憐れみから。どうせこの後、一分も持たず別れるのだ。変に情けをかけて縋られでもしたら、たまつたもんじゃない。

そんな予感に耽る背中。その背後にて、致命的な一言が発せら

れた。

「とりあえずお前、もう帰れ」

それは冬治から恋人に向けた、明確な突き放し。彼の声色は粗雑で、何より冷ややかなものだった。

（はい修羅場確定）

夏華の逃げる足は、自然と早足になる。そのまま廊下に出ると一目散に階下を目指した。途中、

「そんな言い方ってないじゃない!!」

怒声がこだました。パンツと、乾いた音も聞こえる。引つ叩かれたのだろう。思った通りだった。が、となるとこのままではまずい。夏華は階段を二段飛ばしで駆け下りると、リビングに滑り込んだ。すると、少しした後バタバタと、荒々しく階段を下りる音が鼓膜を揺らす。

少しして扉が開き、閉まる音がした。さっきの女性が帰ったのだ。あの早さからいって、着の身着のまま。

「……ふう」

思わずホツとする夏華。毎度のことだが、この一時はいつになっても慣れるものじゃない。痴情のもつれが、どんな齡でも起こるのと同じく、男女関係というのはかくもハラハラさせられるものだった。

何分か経って後、派手なトランクス一丁の冬治が、体を引きずらせながらも二階から下りてくる。左頬には立派な紅葉<sup>てがた</sup>が、赤く色づいていた。

「これまた、思いきり引つ叩かれましたねえ。差し詰めBパターン？」

「Bパターン？　なんだそりゃ」

朝っぱらからビンタを受けた男らしく、冬治は不機嫌そうにリビングに入ってくる。そのままの足取りで、夏華を横切り、奥の台所

へと進んだ。その際、なんてことない仕草で妹の頭を撫でる兄。

「これまで兄さんがフられてきた過程を、五つに分類してみたんです。Bパターンは暴力沙汰。ちなみにAパターンは自然消滅でCパターンは」

「はいはい分かった分かった。それより、顔洗ってうがいしてきな」  
こちらの長けた分析力を無碍にする、冬冶。彼は台所で、料理の下ごしらえをしている。

一方、夏華も台所までついてきていた。そして、兄を手でしつしと、どけの合図を送って脇に寄せさせる。水場に独占市場を築いた夏華は、悠々とカランを捻って水を出した。

「分かってます。だからついてきたんじゃないですか」

「はあ？ だったら早く洗面所に」

そう喋る冬冶の言葉が途切れる。彼の視線は、妹に釘付けだった。かくいう夏華はというと身を乗り出し、その迸る水に横から口を差し込む。

うがいしていた。

すかさず兄が、そのカランを全開にする。

「あばばばばっ！？」

口内に尋常でない水量が注ぎ込まれ、夏華は悶絶する。軽く溺れていた。鼻の奥にまで水が這い上がってきて、顔を泣きっ面にさせた。

「何てことするんですか兄さん！！」

「バカか、お前は。コップも使わず直になんて」

「バカなのはそっちの方です！ 知ってます？ コップ一つとってみても塵や埃、果てにはばい菌なんてものがウジャウジャと」

「んなの、一回洗えば済む話じゃねえか」

「んなの、いちいちやってたら面倒くさいじゃないですか」

「お前……」

冬冶は痛い子を見る目で、こちらを咎める。が、夏華は意にも介さなかった。こういう性分である以上、むしろ彼の方が間違ってる

とすら思っている。

「とりあえずお前、やるなら洗面所にしろ。少なくとも、俺の見えない所で」

「何言ってるんですか？ 兄さん」

「ん？」

「あつちだと蛇口と洗面器の間が狭すぎて、顔が入れにくいんです。その点、ここだと広いじゃないですか。というか、でなきゃここまで来るなんて非効率的なことはしません。悪しからず」

言って、カランをさっきとは逆に回す。水の出を抑えると、髪をかき上げ身を乗り出し、迸る水に横から口を差し込む。

改めて、うがいをした。

改めて、兄がそのカランを全開にする。

「あばばばばっ！？」

夏華は狭い立ち位置で、漫画ばりに足をばたつかせる。さっきより水の勢いが強かった。

「バカか、お前は」

「何がですか！！」

「だから洗面所行けて」

狭い空間で、兄妹がささいな口喧嘩を繰り返す。これまた、いつものこと。なので、決着がつくまでには時間がかかるであろうことを、夏華は覚悟せざるをえなかったのだった。



**第一章 不確かな真実（うた）【兄妹で和気藹々】（後書き）**

次回作は明日を予定しております。

第一章 不確かな真実（うた）【兄妹で和気藹々2】（前書き）

落ち着いた二人は和やかに会話を……

## 第一章 不確かな真実（うた）【兄妹で和氣藹々2】

洗顔と、うがいとを済ませた夏華は、身支度も終わらせていた。うつすらと分らない程度の薄化粧に、きちんとスカートの丈を守った制服を着こなしている。見本の女子高生といった所だ。ついでに黒フレームの眼鏡もかけてるものだから、その雰囲気はまさに優等生。

「早くしてください。今日は登校日なんですから」  
「わーってる。ちと待ってくれ」

台所の騒がしい油の音と共に、冬冶の声が聞こえてくる。只今、料理中だ。とはいえ、作ってるのは朝食ではない。朝食は既に、テーブルに並べられてる。今日のご飯はチャーハン。お味噌汁の代わりに酸辣湯。おかずには餃子と……

（悪意だ。悪意が見える）

冬冶にそんなつもりはない　そう知った上でも、夏華は疑ってしまう。

この中華地獄は、妹に対する当てつけではないのか？

実は胃がもたれる女性に興奮を覚える、そんな家族に言えない悩みを抱えてるのではないのか？

兄は中国人で……となると自分も中国人で、中華を食べさせることには、まだ日本人と自覚してる妹に対する、ある意味でのシヨック療法なのか？

男という生き物は、そもそも中華しか作れないようにできてるのではないのか？

頭を巡る雑多な問いかけは、後になる度、おかしいことになっていく。とにかくにも、言えることがあるとすれば一つ。それはつまり、救いようのない悲劇だということ。

過去に一度だけ、夏華は「中華なんてもう懲りごりです！」をこり押ししたことがある。案の定、兄とは大喧嘩になったが、こちら

としても色んな意味で引けなかった時期だったのだ。

そうして次の日、学校の楽しいお昼時間にて、開かれた弁当箱。中身は純和風だった。おにぎりが三つ。ただそれだけ。たくわんすら添えられてない。それで十分だった。

この一時、夏華は人目も憚らず涙した。あの感動は、あの感激は、時が経つても忘れられるものではない。その気持ちは收拾がつかず、今でもコンビ二のおにぎりを見る度、胸を詰まらせている。それくらいに、衝撃的な一幕。だから、この時は思いもしなかったのだ。終わりが、もうすぐそこまで来ていることを。

それは、食べた時にやってきた。おにぎりのタネ 具材は、酢豚だったのだ。

当時、料理のレパートリーが少なかった冬治は、三つしか作れなかった。酢豚、チャーハン、そしてラーメン。不幸なのは、夏華がそれを知ってしまったという点。加えて、弁当箱には、おにぎりが三つ。

夏華の目が眩んだ瞳が、急激に冷静さを取り戻していく。するとどうだろう。三つの三角の内一つだけ、明らかに萎びた、むしろビチャビチャなソレがあった。所々原型が崩れ、米粒の隙間からはニユルニユルの

「ひいっ!？」

「どした? 何か悲鳴みたいのが聞こえたけど……それより、ほら」  
こちらが心の傷を回想トラウマしてる内に、どうやら冬治は料理を作り終えようだ。テーブルに置かれる、三つの箱物。一つは白色、一つは紺色、最後の一つは赤色の風呂敷に包まれている。お弁当だ。ちなみに、白の弁当箱は夏華のお昼用だ。

「今回もよろしく頼む」

「かしこまりました」

言って夏華はわざとらしくかしこまる。ようやく、二人が食卓についた。

「では……いただきます」

「いただきまーす」

お決まりの声をかけ合い、食事に入る。夏華は、事前に台所から持ち出したキッチンペーパーで、まずは油の吸い出しに終始したのだった。

## 第一章 不確かな真実（うた）【兄妹で和気藹々2】（後書き）

何だかんだで一日も待たず、投稿することができました。次回作は近日中を予定しております。

第一章 不確かな真実（うた）【兄妹で和気藹々3】（前書き）

兄妹喧嘩の余韻残る中、テレビではあの事件を取り上げていて……

## 第一章 不確かな真実(うた) 【兄妹で和氣藹々3】

「お前なあ……」

その一言を皮切りに、冬冶の説教が再び始められる。片や、夏華は「はいはい」で受け流すと、雰囲気のを和らげるべく、テーブルに置かれたリモコンを手を取った。

テレビをつける。

「夏。食事中にテレビを見るんじゃない」

「はいはい」

空返事しながらに取り合わない。夏華は、ぱさぱさにしたチャーハンをレンゲで掬うと、かっこむ。ふわっと、芳ばしい香りと共に馴染みの薄味が口いっぱいに広がった。

丁度そこに、映像と音声が入ってくる。それは現場付近、その上空からのレポート。ヘリを利用しての実況中継だった。

「……ということでの今の所、六号向島線の道路が封鎖されるに留まっています！ 幸い、深夜の出来事ということもあってか、特に目立った混乱、被害等は見受けられません！ ですが、ここから見ていただければ分かるでしょうか？ 分断された逆さまの先端に、上を失った東京スカイツリー……そびえる光景はまさに異様といった所です！ そして、それ以上に奇妙なのがこの断面！ 綺麗に真つ二つとなっています！ さきほど建築関係の専門家にお話を伺った所、このような形での崩落は構造上ありえないとのこと！ ならば、何故犯人はこのようなことができたのでしょうか？ 謎が深まるばかりです！ どうやったらこんなことができるのか、また、誰が、何の為にこのようなことをしたのか……今後警察の実況見分を待つて明らかになると思われます！ こちらからは以上です！」

プロペラ音がけたたましいせいか、ナレーターの男は大声で、眼下に広がる景色を中継している。必死さと緊迫感がよく伝わってくる。スタジオへの返し方も上手で、ベテランの域を感じさせた。



一方、冬冶はというと、画面を見ずに黙々と酸辣湯をすすっている。夏華と向かい合わせに座ってる為、そもそもがテレビから背を向けてる格好なのだが、どちらにせよ彼が食事中、別のことをするということはない。

普段、これでもかというくらい荒さが目立つ兄でも、それが家庭のことになると一変するのだ。古風な考え方を貫き、そうするよう家族に言い聞かせる。一家の長というのはどこもかしこも、こんなものなのかもしれない。

そんな、余計なことを夏華が考えてる内に、いつのまにか画面はスタジオを映していた。そこでは、襟元を正したアナウンサーの女性、つらつらと手元に置かれた原稿を読み上げている。

『 そうです。唯一犠牲になった同電波塔の警備員、室井健人 むろいけん さんについてですが、警察の調べによると実は暴力団組織、白道会 はくどうかい の元組員だったとの情報が入ってきており、それが今回の東京スカイツリー崩落事件と何らかの関係性があると見て現在 』

大事な締め言葉、その直前でピツ、という効果音と共に画面が真っ黒になる。夏華はリモコンを置いたはずの位置に目を向ける。ない。

次に、冬冶の方に目を向ける。

あった。

誰が肝心の所でテレビを消したか、言うまでもなかった。

「兄さん。それは、宣戦布告ですね？」

「はあ？」

「まさかこんなことになるなんて……正直失望しました。リモコンを奪い合うが、兄妹の常といえども、妹思いの兄さんならきつとしない、そう信じていましたのに」

「十分思ってるじゃないか」

「どこがですか？」

その問いに冬冶は、信じられない一言を発した。

「だってテレビ見ながらじゃ味、分からんだろ？」

普通の答え。真つ当な回答。それでも、夏華は耳を疑った。

（中華<sup>コレ</sup>を、味わって食べると？）

日々、料理を作ってくれる冬治には感謝している。が、ここ一〇年以上、夏華は中華中心の食生活を強いられてきたのだ。最近でも通りで「ラーメン」というのぼりを見かけては、地団太を踏んだものだ。それでいて、この中華を味わえなど、夏華にとっては挑発行為以外の何ものでもない。

つまり、やることは一つだった。

「兄さん……………あなたという人はあつ！」

そして、兄妹喧嘩は始められた。

何時間と待たず始められる二人のささいな喧嘩。

当の二人は、暴力行為はないものの、熾烈な舌戦をくり広げている。それは家族ならではの、厳しい言葉の連続。「中華ばかり食べさせるなんて、ありえない……………健康管理がなっていないですよ！そんなんで保護者顔ですか！」から「そんなんだから、女性にふられるんです！」という意味不明のものまで、様々。

無論、冬治も「食事でのマナーはな、普段やつとかないと、いざって時にできやしないんだ。困るのはお前なんだぞ！」から「そもそも潔癖症なのが悪い！」という訳分からないものまで言いだし、引けはとらなかった。

相変わらずな二人に、毎度の口喧嘩。

それは無駄に見えて実の所、夏華にとって大切な家族の時間なのであった。

第一章 不確かな真実（うた）【兄妹で和気藹々3】（後書き）

次回作は、いよいよ本作の目玉でもある歌が絡んでくるので、もしかすると明日に投稿できないかもしれません。頑張りますが仮に何日か遅れてしまったら、申し訳ございません。

第一章 不確かな真実（うた）【歌聴きながらの登校】（前書き）

急いで登校する夏華。 自転車に乗りながらも、イヤホンで聞くナン  
バーはあの……

## 第一章 不確かな真実(うた) 【歌聴きながらの登校】

「ほらもうこんな時間になっちゃたじゃないですか兄さんのクソバカ！」

食卓での家族喧嘩という、ありきたりなことをしてしまった結果、気付けばもうこんな時間。夏華は玄関で靴を履きながら、踵をトントンしていた。はめた腕時計で時間を確認しながら、出入り口の扉に手をかける。と同時、

「夏」

声がかけられる。

「何ですか！」

焦ってるせいか、同じテンションで返してしまう。

「行つてらっしゃい。気をつけて」

それは当たり前、何てことない決まりごと。夏華はまともに取り合わない。

「はいはい。行つてきます」

そのままの勢いで玄関を出た。すると、眩しい照り返しに晒され、少しふらついてしまう。カラッとした冬空。雲一つない青空は、今にも吸い込まれそうだった。見上げると丁度ツグミが三匹、蒼穹に羽ばたいていった。

「寒っ」

室内との温度差に、体を身震いしてしまう。

夏華は、すぐ側に止められた自転車のスタンド、そのロックを外すと蹴り上げた。後、跨る。

サドルにお尻を乗せると、冷気のせいか、腰を上げるほどに冷たかった。

これで、出かける準備は整った。夏華は制服のポケットをまさぐると、その中にある紐状の物を掴み取り出す。イヤホンだった。その先端は、MDプレーヤーに取り付けられている。

ペダルを漕くと共に、押された再生ボタン。

初めに流れるのは、大好きな兄ひとの歌だった。

今では表舞台で歌われることのなくなった、そんな昔メロディーの思い出。

「……………よし！」

そして、夏華の一日が始まった。何が起こるか分からない、だからこそ憂鬱で、だからこそ希望ある、そんな一日が。

チャリラリラ〜ン

それは陽気な旋律イントロ あの前東京スカイツリーで流した曲と、全く

の同曲だった。違うのは、歌い手が夏華アマチュアでなく、冬治プロだということ。

夏華は、ハンドルを掴む指で、小刻みにリズムを取った。そうしたくなるくらいに、キャッチーな音律。

流れる景色は、ついさっきまでとは明らかに違ったのだった。

？ 始まりの歌 五線譜じゃ伝わらない 十八番ナンバー

でかけましょう 世界を君色に塗り変えてこう？

Aメロに、夏華は穏やかな気持ちになった。澄んだ、人を奮わせるだけの声質。飾らないそれは、磨かれた宝石に似た、円熟度を放っていた。

元氣が出る、テンポの良い入り。

暖かな曲想は、冬というよりは、春のうららかなを思わせる。そういう意味では、これからの季節にぴったりだった。

一方、自転車に乗った夏華は、歩行者らを追い抜き、坂道を下っていく。住宅に面したそこは、地元の人がよく使う道だった。一つ、また一つと家々が流れていく。

いつもの光景。

けれども、歌を聴く夏華にとって、映る光景は一味も、二味も違った。

道行く人が明るく見え、どんな暗い顔をしたサラリーマンでも、その瞳の奥に宿る強さを見ていた。

並び立つ、何てことないガードレールや、冷たいアスファルトの路面。そんな気にも留めないものが、一瞬にして煌びやかな花道へと移り変わる。

今日もここから、一日が始まる。

ここからが、一日の始まり。

当たり前すぎて忘れがちな、そういう一步の重みを、歌は気づかせてくれる。

勿論、大袈裟といえば、大袈裟。

けれど、楽しかった。ただ純粹に、歌の世界に浸かっていたい。

変な見栄も、意地も恥も脇に置きさえすれば　　いくらでも世界は、自分色に塗りがえることができる。

？青空　太陽　どしゃ降りの心

うらはらの心　精一杯のSOS

響く　マイミュージック　あなたの痛みに

贈ります　目一杯の　ラブソングを！？

Bメロは、Aメロのテンポに合わせながらも、よりリズムカルなものだった。段々と盛り上がっていく、定石のメロディーライン。

ただ、夏華は歌を聴いてる最中、急に顔をしかめる。今頃になつてあの、東京スカイツリー崩落事件のことが頭をよぎったのだ。

取り返しのつかないことをした。そのことへの罪悪感<sup>つた</sup>は拭えないが、それとは関係なく歌われる詞が、夏華の心を揺さぶっていく。そこに込められた真心は、より人を高揚させ、浮き足立たすだけの魅力で溢れていた。

サビ前の伴奏で、ドラムの打音が強くなっていく。それに合わせ、ギターやベースを含めた音の総和が、一気に耳へ押し寄せてきた。否応なく、聞き手のボルテージは高められる。

いつしか夏華は、罪の意識など、どこか隅の方に追いやってしま

つていた。

勿論、仮初めといえ、仮初め。

歌が終われば、また現実に戻り、罪悪感に苛まれることになるのは分かっている。それでも、忘れられた。赦されていた。

この一時ばかりは確かに、夏華は救われていたのだった。

？真っ逆さまに落ちた　あなたを救うための　フレーズ

響かせるよ

どんな遠くからでも　届かない声にも　フレーズ

届いてるかな

あなたが幸せでも　不幸せでも　どんな君でも僕は待つてるから  
嬉しくなったら　苦しくなったら　いつでもおいで

聴きにおいでよ　あなたが選ぶ十八番<sup>ボク</sup>を？

Ｃメロ（サビ）は、流れるようにしたためられた調子だった。勢  
いが感じられるそれは、これからを祝福する、そんな後押しが込め  
られている。

ともすれば、今の心境にぴったりの詞。

慰めになればと、選んだ曲。

それが、自分の心にどう響いたかは、上手く説明できない。

変わったことといったら、漕ぐペダルの回りが知らず速められた  
ことくらい。

気づけば、坂道は平坦な道へと切り替わっていた。後は、うねる  
ように舗道を蛇行し、いつもの上り坂を越えれば、そこではもう学  
校が見えてくる。

とはいえ、それまでに待ち受けているのは、真冬の厳しさ。歌を  
聴き入ってたら寒さを忘れました、なんて都合の良いことは起こら  
ない。現に、手袋を付け忘れた夏華の手は、寒風で痛いくらいに凍  
えていた。耳回りもこの寒さで真っ赤になり、堪えきれず手で擦っ  
たほど。

けれど。



けれども、歌を聴いてると何故か、逃げたくなるような世界は、その寒ささえ、その痛みさえも嫌いになれない世界へと、印象を変えていったのだった。

**第一章 不確かな真実（うた）【歌聴きながらの登校】（後書き）**

詞に手間取って、何日か遅れてしまい申し訳ございません。次回作は近日中に投稿したいと思っております。

## 第一章 不確かな真実（うた）【学校に到着】（前書き）

ようやく、学校に到着した夏華。まずやるべきことは教室に行くことではなく……

## 第一章 不確かな真実（うた）【学校に到着】

「おはようー」

「おはようー」

学校に着いた夏華は、自転車を所定の駐輪場に置くと、そこで鉢合わせた顔見知りと声をかけ合っていた。

女学生同士ならではの、齒の浮いた声色。

正直、あまり慣れたものではなかった。ただ、学校生活を快適に過ごすためには、なくてはならないものでもあるので、満面の笑みでこなしていく。

駐輪場のある校舎裏から、ぐるりと回って表に出ると、そこでは登校する学生でごった返していた。

（間に合ったあ……）

たくさんのお客がいるおかげで、夏華はホッとしていた。そのまま、その大勢の流れに混じって校内へと入る。下駄箱に辿り着くと、靴からなのか、そこ特有の何とも言えない匂いが鼻についた。

下駄箱は左から一年生、二年生、三年生の順に区分けされている。夏華は高校二年生なので、真ん中を突き進んだ。周りを見ると心なしか、急いでる人がちらほら見受けられる。まだ時間はあるが安全を期したい、そんな微妙な頃合なのだろう。

人に流されやすい性格なのか、何だか夏華も焦ってきた。自分の下駄箱から上履きを取りだすといい加減に履き、まずは三階を目指す。ちなみに、ここは三階建てで、三階から一年生、二年生、三年生の順に階を下がっていく形をとっていた。と、いうことは夏華が本来向かうべきは二階で、三階は一年生の領域である。

けれども、そこに行く理由は、ちゃんと存在していた。渡さなければいけないのだ。妙に重く、パンパンになつてる学生靴の中にあるものを。あの弟に。

従って夏華は、急いで階段を駆け上がっていったのだった。

「　　いない、ですってえ……？」

三階という、いつもより多い段差を駆け上がってきた夏華。澄ました顔して、息切れしている。が、時間は待ってくれないので、彼がいるであろう教室で、恥ずかしながらそのクラスメイトを呼んだのだ。そして、呼び出してくれるよう頼んだのだが、当の本人はまだ来ていないとのこと。

そもそも下級生ばかりの所に、ぽつんという上級生というだけで、辱めを受けてるも同然だった。登校中のドタバタがあつてか、実際はさほど注目されてないが、夏華自身は顔を真っ赤にさせている。

（あんのおバカ）

怒りの矛先は、まっすぐ弟に向いていた。

夏華は今度、階段を駆け下りていく。長年の付き合いからか、大体の居場所は分かっていた。とはいえ、ゆっくりなどしていられない。何せ、階を上がってくる学生らの雰囲気、危機迫るものなのだ。「どけどけどけえ！」とでも言ってるかのような瞳で、突っ込んでくる男子学生すらいる。

もう、時間がない。

夏華は、最悪の事態を想像しながらも、足を走らした。一階そのパソコン室へと。

後にしよう。そう何度も思うが、どうにも踏み切れない。

実際、遅刻などしたことのない自ら。では、そのこだわりを捨てても渡さなければならぬ物なのか、と問われればそうでもない。それでもないのだが結局の所、一階まで来てしまっている夏華なのであった。

校内に、無情の鐘が鳴り響く。

夏華はとりあえず弟を引っ叩こう、そう心に誓っていた。

パソコン室前まで歩くと、その扉を開き中へと入る。

(……いた)

案の定、彼 加藤千己ちぢはそこにいた。ずらつと並ぶ数十のパソコン、その内の一つに座っている。入ってきたこちらを気にもせず、勝手に電源を入れたであろう、パソコンの画面を見ていた。打たれるキーボードのかちやかちやした音が、静まり返った空間にはよく響く。

夏華は、一目散に千己の元へと向かった。彼は一年生だが、とてもそうは見えない小柄な体型をしている。そのことは彼もコンプレックスに思ってるようで、弄るとこれでもかというくらい怒る。ただ、その形姿に合った可愛らしい顔つきをしているので、夏華はむしろ、背がちっちゃくて良かったなと思っていた。よく、反射的に抱き締めたくなるのだ。そんな時、手が届く高さにあるというのは、とても素晴らしいこと。

とはいえ、今の千己は何か違った。

まるで、時代劇に出てくる悪代官のような下卑た笑みで、口角を釣り上げらせてはニヤニヤしている。彼はいつもかけてる黒縁眼鏡を、手で少し持ち上げて、下した。その仕草もキザっぽい。

とにかく気持ち悪いので、夏華は千己の近くまで行くと、とりあえず引つ叩いた。

「どへええ!？」

普通、叩かれた人がおよそ言わないであろう反応をする彼。姉は、弟の将来が心配だった。

「アンタねえ……そういう厨二的な所、どうにかなさい。それより何やってんのよ、チコチコ」

「チコチコ言うな! ウィンカーか俺は。って何だ、夏か」

もう一発引つ叩いた。

「ぎゃぴい!？」

「言つか!」

思わず、ツツコンでしまう夏華。

「何がだ！　ていうか何しやがる！」

「姉さんと呼びなさい。後、目上の人に対しては敬語。親しき仲にも礼儀あり、でしょう？」

「出たよ潔癖症<sup>けつぴ</sup>」

まるで、アメリカ人ばりに両手を肩の所に上げ、横に動かしヤツテラレナイヨを表現する。その、ひらひらさせた掌を夏華は掴むと、軽く関節技を決めたのだった。

途端、千己が泣きべそをかく。

「……たく」

どうにも、姉の前では甘えがちな性格が出てしまうようだった。

夏華は、痛めた千己の手を撫でると、抱き締める。

「ちよろいな」

一瞬、彼の口から、聞き捨てならない腹黒さを耳にした気がしたが、母性本能をくすぐられた夏華は、姉っばいことをしたくてならない。なので今は、特にお咎めなしに

「臭い」

というか、そんなことより、千己の体臭の方が気になっていた。

少しきつめのそれは、友達には分からないが身内には分かる、そんな微かな臭い<sup>にお</sup>。

夏華は注意せずにはいらなかった。

「アンタ、昨日お風呂に入らなかったでしよう？　体を不潔にしていると、女の子にモテないわよ。それに学生服も皺<sup>しわ</sup>くちや」

「三次元らしいもの言いだな。結構。俺の生きる二次元じゃあ、そんな『弟くんの匂いがする。えへへ』で済まされちまうんだなこれが！」

「今日はきちんと、家に帰ってきなさいよ。昨日のは私から兄さんに、ちゃんと理由付けといたけど、今日も帰ってこなかったらアンタ……無断外泊ってことになるからね」

夏華は、千己の相手はせずに用件だけ伝える。そして、鞆を開け取り出した。紺色のお弁当を。

「出たな中華弁当！」  
デス・チャイニース

「いちいちうるさい。もう」

夏華は、彼の妙なテンションに辟易しながらも、どうしてか同情していた。中華づくしに苦しめられてきたのは、何も夏華だけではないのだ。

「ここまできたら、色々と諦められるでしょ？ はい。後これ」

もう一つ、小さめで円錐状のタッパを、その弁当の上に置く。その際、何かタプンといった水音がした。小脇には、レンジ。

「おい今タプンって言ったぞ！ タプンて！」

「だから……デザートよ」

「な訳あるか！ ていうかアレでしょ！ アレなんでしょ！ 弁当にあるまじきアレやつちゃったってことだよね！ あのビチャビチャでニユルニユルの」

「「ひいっ！？」」

二人して、身震いしてしまった。条件反射の賜物。だが、夏華は飯にも姉である。なので、できるだけ千己を落ちつかせられるよう、努めて優しく語りかけた。

「安心なさい。麺は伸びるでしょうけど、味は保証できる。お昼休みになってからだって傷んだりはしないでしょうし……周りなんて気にしないで啜れば」  
すす  
フレイブ

「俺にそんな勇氣はねえ！！」

夏華にも、そんな勇氣はなかった。お昼休みにラーメン弁当なんて、苛めてください、そうクラスメイトに言ってるようなものだ。

「私だって辛いだよ。こんな、朝からなのよ」

込み上げるものを抑えきれず、胸を詰まらした。すると、千己がその頭を撫でる。お互い、この一点については、どうやら気持ちが通じ合っているようだった。

「俺ら、苦勞が尽きねえな」



「ええ……ところでアンタ、パソコンで何やってたの？」

言いながら夏華は、パソコンの画面を見やる。そこには、有名な二チャンネルと呼ばれるサイトの画面が映っていた。要は、何か提示された話題について、色んな人が色んなことを語り合う、そんな感じのものだ。

彼が開いてたブラウザの画面、その左上に表示されていたのは、「東京スカイツリー崩落事件」という文字の羅列。

夏華は、中をちよつと覗いてみた。

**第一章 不確かな真実（うた）【学校に到着】（後書き）**

次回作は、明日を予定しております。

## 第一章 不確かな真実（うた）「2チャンネル」（前書き）

ちよつとした興味でブラウザを覗く夏華。映っていたのは……

## 第一章 不確かな真実(うた) 「2チャンネル」

ぶっちゃけ、誰の仕業だと思うよ？ 何かニュースじゃ暴力団だの組織ぐるみだの言ってるけど実際どうなん？

うーん。何か白道会が絡んでるみたいなこと言ってるけど、どうだろうな。だってあそこ、規模小さくね？ 華道会かどうかいくらい、でっかな組織ならあのくらい、できても不思議じゃないけど

知ってるか？ 白道会って実は、華道会からの分派なんだぜ

マジか！？ じゃあ白道会の裏には華道会が糸を引いてて、それで日本を狂気の沙汰に……ブルブル

ただの暴力団抗争の一種じゃね？

てか、さっきの華道会と白道会の件は釣りだぞ！ くだり みんな騙されるな！

釣りじゃねえし……てかそんなことして何になるん  
実はやったの、俺だ。生まれつき、世界を変えられるんだ。言いたいことは？

給料上げてくれ

あのさ、自分だけかもしれんだけどこれってさ、9・11を思い出さね。あの貿易センタービルに突っ込んだヤツ

あー、てことはテロ！？ イラクから！？ いやいや北朝鮮からか！？

いやいや。無知すぎるだろおまいら。そもそも9・11の貿易センタービル崩落には、綿密に計算された計画だったんだよ。人種のるつぼとも言うべき多民族国家のアメリカは元々、多くの民族対立や遺恨を抱えている。で、あの広大な領土。何か大きなきっかけでもあれば、そういった問題が一気に噴出して、アメリカって国がバラバラになる恐れすらあったんだ。そこでテロリスト達が考え出したのが、あの9・11。アメリカの象徴とも言える建物をぶっ壊すことで、国家分裂を図った。発生直後、街のあちこちに母国の星条

旗が掲げられるのが目立ったりしたのは、その反動　アメリカの危機感の表れって訳。で、分裂しそうになった国家を再び一つにする為に、同じ方向を向かせる為にイラク戦争を吹っつけたと。それに比べて日本はどうだ？　多民族じゃないわ、東京スカイツリー最近できたばかりだわ、全然違うじゃねえか

はいはい。ま、要はテロと

そそ。テロテロ

待て待て。ヤクザの件はどうなった？

いやもう何かどれも違うね。そもそもあんなん、人ができる業じやねえって。何かもつとぶっ飛んだ何かが作用してさあ

神だ

「ななな何てことしやがる!!」

途端、千己の抗議の声が飛ぶ。気づいたら夏華は、パソコンの電源ボタンを指圧していた。

結果、真っ黒になったパソコン画面。とはいえ、強制終了させた夏華に負い目など皆無だった。

大体、どのスレが弟のものか分かっちゃおう。それだけに、やっぱり姉は弟の将来が心配でならなかった。

「こんなくだらなない仮想世界とは、早くおさらばなさい。いいわね？　後、サボるなら最低限の登校日数は守ること。でないと」

「でないと？」

「　兄さんに知られる」

「……!？」

脅しとしては、十分すぎる言葉だった。千己は、肛門が縮こまったといった所だろうか、体を強張らせている。

「ま、私がチクるなんてことはないから、そこは安心なさい。と、いうことで私は授業に出るんで、また後でね」

そう言っって用事を済ませると、夏華はやっと自分のことをすべく、二階への一步を踏み出したのだった。

校内に、無情の鐘が鳴り響く。

二回目の鐘の音、ということは朝礼が終わり、一時間目の授業が始まったということ。より、教室に入るのが気まづくなつたの思い知らされながらも、かといって向かわずにはいられない性分の夏であつた。

## 第一章 不確かな真実（うた）【2チャンネル】（後書き）

次回作は近日中を予定しております。

第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会1】（前書き）

下校しようとする夏華。だがその前には、黒塗りのアレが……



## 第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会1】

夏華は、学校の授業を一時間目の中盤から参加し、残りの授業も無難にこなしていった。途中、お昼休みに「私今日、食堂で食べることにしたの」という嘘をつき、食したあの味は今でも思い出しにくい。わざわざ屋上という寒空に出たせいで、リップクリームを塗った唇は紫がかってしまったもの。たまたまそこに居合わせた千己の、箸を持つ手は震えていた。冬空の下、思わずそんな彼を抱き咽び泣いたことは、この一家にとって珍しいことではなかった。

こうして、何だかんだで、気づけば放課後。

夏華は再び、下駄箱の所まで来ていた。とはいえ、このまま家路に着く訳でもない。やることがあるのだ。渡さなければいけない。少し軽くなった、学生鞆の中にあるものを。あの姉ひとに。

夏華はすべきことの為に、靴を履いて校舎を出る。見える風景は登校時の、学生がわんさかいた時とは、ガラリと変わっていたのだった。

黒塗りのベンツが止まっている。校庭      グラウンドを横切った先、つまりは夏華の目前に。

煌びやかな艶に、美しい曲線のフォルム。

全長にして、五メートルはあろうか。

ただ、それ以上に夏華が気になってるのは、タイヤ痕の方。

まるで、その車体でグラウンドをドリフト走行してきたかのように、そこかしこにそれが散見される。土に残るそれらは、こここれから部活しようという人達にとっては、この上ない迷惑行為だった。よく漫画などにある、不良が主人公の学校に乗り込んでくるより、たちが悪いように思える。ただ、下校する学生らにとっても先生らにとっても、これは見慣れた光景なので何も言わない。とい

うか、見て見ぬふりをしていた。が、問題の渦中にいる夏華は、それがしたくてもできない。

（また……）

夏華は、心中穏やかでなかった。それでも驚かないのは、前例があるから。こういうのが実の所、自身に友達ができづらい理由でもあった。

こちらが待つてみせても、どうやら何も起こりそうにない。なのでまずは、いかにも高級そうなベンツ、そのバンパーを蹴り上げてみた。

途端、車のドアが開き、が体の大きいスーツ姿の男が飛び出てくる。強張った顔つきで頬には、刃物によるものか、痛々しい裂傷の痕が刻まれていた。厳しいその風貌は、四〇代の齡に合った、そんな雰囲気醸しだしている。

その中年男が放つ、渋い一声。

それは、

「お嬢！ 何するんですか！」

およそ現実世界では耳にしない呼びかけだった。おそらくは弟にやるものであるう。

夏華は頭痛でもないのに、頭を抱えた。

「近藤<sup>こんどう</sup>。何ですか、その呼び方は」

「い、いえ。千己坊<sup>ちごぼう</sup>が、お嬢は本当はそう呼ばれたいんだって、そう教えていただきまして」

「私はこれまでも、そしてこれからも、そんな呼び名に喜びは覚えることはないでしょう。だから、いつも通りの呼び方に戻してください」

「分かりました！ お嬢！」

分かっただった。

夏華は、困ったように人差し指をおでこに当てると、考え込む。

（あんのおバカ。この堅物に何言った？）

基本的に、近藤という人間は仁義に熱く、義理堅い。なので、言

われたことはバカの一つ覚えみたいに遵守するのだ。が、さっきの言葉には耳を傾けなかった。こんなこと、普通は考えられない。

すると、パシャッと、何かのシャッター音を耳にした。見ると、近藤がこちらに向け写メを撮っている。あまり見ない、というより初めての光景だった。

「近藤」

名前を呼びながら、睨みつける。

「あ、すみません。けど仕方ないんです。ミッションが……」  
「ミッション？」

さっきの「お嬢」といい「ミッション」といい、何やら二次元の匂いがプンプンする。

夏華は、その写メールを撮った携帯を、やおら彼からもぎ取ると画面を覗く。

映っていたのは、困り顔をする夏華だった。

とりあえずはその画面を閉じ、次にメールの受信ボックスを開いてみる。すると、新着で未開封なのがあった。一件。送り主の欄には「当局」。

読んでみる。打たれていた文面は、非常に簡素なものだった。

『それが萌え』

夏華は思う。なるほど、そういうことかと。

次に、開封済みのも読んでみる。すると、

『今回、君に与えられた指令は夏華こと、加藤夏華の送迎。ただ、いつもとは勝手が違う。どこからか敵に、その情報が漏れてしまったのだ。よって奴らは、君が停車させる所定の位置に合わせ、狙撃手を忍ばせている恐れがある。なので今回、相手の裏をかき、校内に乗り込むとしよう。無論、車でだ。が、そこも安心できる環境とは言いがたい。おそらく最大の難関は、グラウンド。最も見晴らしがよく、故に仕掛けられやすい。更に事前探査してもらった所、その地中にはBAUER24という、最新鋭の地雷が至る所に埋められていているとのこと。それは、人が安堵すると爆発するという、と

にかく一癖も二癖もある厄介物だ。つまり、君は校庭に入ったら、敵の照準が車体に合わぬよう攪乱させ、且つ下に潜む爆破物を回避しながら進まなければならぬ。とても困難な道のりだ。が、君ならやってくれると信じている。こちらからは以上だ」

『夏華の言動には注意せよ。奴は仮にも女子高生キヤラ。必然的に、ツンデレがついて回る。今更、このことに説明はいるまい？ 嫌と言ったら好き。やめろと言ったらやってくれ。つまりは、嫌よ嫌よも好きの内という設定で、二次元では空気と同じ扱いを受けている故に廃れたテンプレだが、そこには鉄板なりの熱き血潮が』

メールの文面にはまだ続きがあったが、もう十分だった。何で校庭がアクション映画ばりの惨状になっているのか、何でこちらが呼び名の訂正を求めても流されたのか、色んなことがよく分かる。

（こういった、てんやわんやを楽しめる場所といたら……あそこしかないか）

そう思いながら夏華は、学校の屋上を見上げる。と同時に、小さな人影が引つ込んだ。

（もうバレてるって）

高みの見物と洒落込んだつもりであろうが、姉は何もかもお見通しである。

「近藤。携帯、没収しますね」

「え、ですが、これからその画像を若い衆に高値で売りつけるっていう、実はお嬢が人気者だっていう設定を」

「近藤……あなた、んなダンディな声で何言ってやがりますか。何でもかんでも人の言うこと、丸呑みにしすぎなんです。いいですか。千己の言うことは、全部でたらめです。私の言うことだけを信じなさい。いいですね？」

「え、ですが」

「いいですね？」

「は、はい」

これだけ念押ししたことで、ようやく近藤は夏華の言うことを聞

くようになる。

「では、まず呼び名から改めましょう。さあ、いつも通りに呼んでください　夏<sup>なつ</sup>っちゃんと」

「え？ 私、いつもは夏華様と」

「夏ちゃんと」

「夏華様」

「夏ちゃんと！」

有無言わさぬ視線で、夏華は近藤の答えを待つ。

言わせたい。何か言わせたいのだ。

対して、彼は一瞬、引きつった顔を見せる。が、すぐに気持ちを改めるように佇まいを正した。

(……言う気だ)

自分で振ったくせして正直、おっかなびっくりな面持ちの夏華であつた。

そして近藤は、遂にあの言葉を口にする。

あの渋い重低音で。

あのファンシーな名を。

「お母様が待つておられます。行きましょう……………夏ちゃん」

「　　かあっ！」

堪らず、夏華は腹を抱えて、車のボンネットを叩く。

「お止めください！　夏ちゃん！」

加えて、近藤のダンディズムが追い込みをかける。夏華は堪らなかった。

「夏ちゃん！　夏ちゃん！」

爆笑に、拍車がかかるばかり。むしろ近藤という人間は、わざと言ってるんじゃないかと、そんな悪戯すら邪推してしまう。

結局の所、姉弟共に、やることは似たり寄ったりなのであつた。

**第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会1】（後書き）**

次回は短めですので、今日中に連続で出したいと思います。

## 第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会2】（前書き）

謎に包まれていた夏華の家族構成。それらが徐々に明らかになって  
きて……

## 第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会2】

「ちゃんと校庭を元通りにするとか、後片付けはしてくださいよ。堅気の人には迷惑をかけない。そうですね？」

車内に乗り込むと同時に、夏華は、運転席に座る近藤を正す。

「重々承知しております。その点は抜かりなく」

という彼の言葉に、夏華は窓からグラウンドを覗いてみる。すると、せわしなくトンボをかける、厳つい極道そのの人らが窺えた。いつもは銃チャカやら薬ヤクやらが専売特許な人達。それだけに、やっтерることが子供のおままごとみたいで、滑稽だった。毎度、どこから降って沸いたんだと思うのだが、この組織の規模から言えば、何があっても不思議ではない。

「もう言っても無駄だということは分かっていますが、近藤。学校にまで押しかけてくるなんてこと、しないで頂きたい。おかげで私は今日も、学校で気まずい思いをしました」

「それは、誠に心苦しい限りです。ですが、そうであるなら定期的に、お母様にお会いになつてください。でないとまた、こんなことの繰り返しになつてしまいます」

「だったら、母さんの方が家うちに来ればいいでしょう？」

「それ……本気で仰つてるんですか？」

勿論、憎まれ口にすぎなかった。その理由は単純明快。

もし万が一にも母が家に来て、兄と出くわそうものなら、血の雨が降るからだ。それは冗談でも、誇張した表現でもない。事実、そういう過去があるのだ。

とどのつまり、母と兄は犬猿の仲だということ。

というか、夏華が母と会うということ自体すら、ともすれば危ない橋を渡つてるということになる。当然、兄はそんなこと知らない。



知ろつものなら、家族喧嘩では済まない抗争が起こる。本当に、そんなことが起きてしまうのだから、心は休まらない。

夏華の家系、その相関関係はとても複雑なのだ。

そして、そのことは夏華や近藤に限らず、この組織を生きる人間にとつては周知の事柄。つまりは、悩みの種ということだった。

「にしたつてこのままじゃ、いずれ学校から家に連絡が来ますよ。そしたら必然的に、保護者である兄さんに話が伝わる訳で……どっちにしる取り返しのつかないことに」

「安心してください。そこはきちんと圧力はかけ　ぬおっ!？」

近藤が素つ頓狂な声を上げる。それもそのはず。夏華が後部座席から、前の運転席を蹴つ飛ばしたのだ。

「何がどうしてそんな脅迫めいたことをしたつてんですかええっ!」  
「お止めください、夏ちゃん!　悪ふざけにも程がありますぞ」

呼び名のせいなのか、どちらかというと近藤の方がふざける気がする。無論、こちらとて、高校二年生にもなつて座席を蹴ることに喜びを覚える、そんな能天気な生き方はしてこなかった。ちゃんと、それ相応の理由があるのだ。

夏華はちよつと、色々考えてみる。

そういえば、さっきの一時間目、遅刻してきたのに先生から何も言われなかったなあとか。

そういえばここ最近ずっと、先生の笑顔が妙に痛々しかったなあとか。

そういえば帰り、教卓に置かれた出席名簿で、自分の所を覗き見たら無遅刻無欠席になつてたなあとか。

こう、振り返ってみると夏華は、思い当たる節がありすぎて逆に困っていた。なので憂さ晴らしにもう三度、同じ所をゲシゲシ蹴る。対する近藤は、反応もバカの一つ覚えみたいに忠実だった。その三回に呼応するように、

「夏ちゃん!　夏ちゃん!　夏ちゃん!」

喧嘩を売つてる　そう感じずにはいられない。

実際、高級車の乗り心地が最悪な夏華だった。

## 第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会2】（後書き）

次回作はこちらの都合上、月曜日は厳しいので火曜日以降になります。なるべく近日中を予定しておりますので、よろしく願います。

第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会3】（前書き）

車を走らせ、母の元へと送られる夏華。しかし、着いた場所は……

## 第一章 不確かな真実(うた) 【華道会と白道会3】

そうこうしてる間にも、ベントは他の一般車と同じく公道を走行していく。すると、前方の信号が赤になり、道路上に多くの車列が並んだ。明らかに他車と一線を画すその形は、周りから注目を浴びるには十分だった。前後左右から、車内を窺おうとする奇異の視線を感じる。

夏華は、何も悪いことはしていないというのに、小さく体を縮こまらせた。何故か、顔を真っ赤にさせている。

(というか私、用があるんですけど)

鞆の中に入ったお弁当を、姉に渡さなければならぬのだ。冬という季節性もあってか、食材が傷むことはないだろうが、それでも早く渡すにこしたことはない。ただ、文句を言おうにもその相手は、一度言いだしたら聞かない性分。夏華自身、近藤については重々承知してるので、何も言いようがなかった。

とはいえ、別に母と会うことに抵抗はない。むしろ母のことは大好きだし、毎日会えるものなら会っていたい。そもそも家族して、てんでバラバラなのがおかしいのだ。けど、そんなことを口にしようものなら、兄が悲しむ。露骨に辛そうな顔をさせてしまう。それだけはさせたくないのに、けど、どうしてなのかが分からなくて……結局、無知で無力な自らは、何もできなかった。

今までは。

( ん? )

制服のポケットから、何やら振動を感じる。携帯のバイブレーション。さっき近藤から取り上げた物ではなく、自分のからだだった。夏華が、ポケットからそれを取り出す頃には、震えは止まっている。その短さからいって、メールの着信。

夏華は、携帯画面から受信ボックスを開く。すると、新着メールが一件、届いていた。開いてみる。

『助けてほしいか？』

送り主の欄には「チコチコ」。弟からだった。傲慢なその文面は、屋上から人を見下したテンションそのままに送ったといった所だろう。

とはいえ、かくも女性というのは、偉そうな人が嫌いなもの。なので当の夏華は、返信しなかった。

すると、携帯がバイブする。ついさっきと変わらずの、着信メール。

夏華は、再度同じ動作を繰り返し、それを開いてみた。

『助けてほしいですか？』

敬語になっていた。弟思いの姉としては、思わずクスリとしてしまふ。きつとメールを送った後に、反省したのだろう。こちらが返信しなかったというのもあるが、それ以上に千己は心配症なのだ。

普通なら「めんどくせえ奴」という括りの下、切って捨てられる所だが、そこは家族。

夏華は、彼が好きそうな文面を思案しつつ、指を走らせ文字を打っていった。結果、できた完成形がこれ。

『助けて。弟君』

送信した。すかさず返信される。

『音声メッセージでよろ』

という文字と共に、添付ファイルがあった。何やら見たことのない、文字の羅列。開いてみるべく、その文字を選択し決定ボタンを押し込む。

途端、タッチパネル画面いっばいにコンデンサマイクが現れた。

その画面下には、横棒のゲージが周りの音量に合わせ、上がったり下がったりしている。と、なるとこのゲージはボリウムにあたり、送話口から音を取ってるのであろう。

（声を吹き込めってこと？）

添付ファイルの使い勝手が、分からない夏華だった。おそらくは千己自作のアプリ。

何を隠そう、彼は機械関係にめっぽう強くてアプリに限らず、ブックボックスとも揶揄されるパソコンの性能もいかななく発揮させられるのだ。が、それが時には行き過ぎて一時、取り返しのつかないことになったことがある。本人曰く、反抗期だったとのことだが、そんな言葉では済ませられない大惨事だったのだ。

オタク文化を規制する東京都庁にサイバー攻撃を仕掛けたり、ホームページ検索で「中華」と打って出てきたページにウイルスをばら撒いたり、週間オリコンランキングの一位から一〇位までを全てアニソンに置き換えるというハツカー紛いの児戯<sup>じぎ</sup>まであったというのだから、警察沙汰だった。

それと比べると、今の千己は大人しくなったものだ。おかげで家族の心労は軽減された訳だが、代わりにそのツケがこちらに回ってくるというのだから、ままならない。

とりあえず夏華は、携帯の送話口に声を吹き込んでみた。

「タスケテ。オトウトクン」

抑揚も声量もない、言葉の羅列。外国人口調の如きそれは、感情が全くこもってなかった。

すると、まだ何も操作してないのに、画面に「メール送信中」との文字が映し出される。声が吹きこまれたら送信されるよう、設定が施されていたのだ。

少しの間、夏華が手持ち無沙汰で待っていると、画面に「メール受信中心」との文字が浮かび上がる。それに合わせ携帯を弄ると、新規メールを開いた。

「あれ？」

そこで夏華は戸惑う。文面がないのだ。あるのは添付ファイルだけ。開いてみる。

途端、またしても画面いっぱいになんかが展開した。と、いつても今回は千己のオリジナル

ではなく、youtubeなどにありがちな動画からの引用。どうやら、アニメのようだった。勿論、それがどのアニメか特定できる

ほど、夏華は二次元に精通してない。なので、ちんぷんかんぷんな面持ちで、ただぼーっとしていた。

視線の先では、萌えキャラと思しき女が絶対絶命の危機に陥っている。少女漫画に出てきそうなビックリおめめに、お姉さん風の顔立ち。そして、彼女が見つめる先、悪役（怪獣）を隔てた奥には、千己に瓜二つの少年が……

（嫌な予感がする）

夏華による一抹の不安をよそに、画面上の三役は、勝手にクライマックスを築いていく。

ヒロインであろう女が、少年を見ながら大粒の涙を垂らした。こちらの情報不足もあってか、全くもって感情移入できないが、それでも言うであろう台詞が分かってしまうのだから、不幸極まりない。そして、女は叫ぶ。目一杯に叫ぶ。おぞましい萌えボイスで、あの台詞を。

「助けてええ！！ 弟きゆうう」

絶叫の最中、それは消えた。

というか夏華が電源ボタンをこれでもかと押し、画面ごと消し去った。結果、電源の切れた携帯。

思うことは一つだった。

（……アイツめんどくせえ）

せっかく改心したと思ってメールを返したというのに、終いにはあんな言い方まで強要するという偏愛ぶり。千己は恩を仇で返す変態だった。おまけに車内に変な声が響き渡ったせいで、夏華は変な羞恥プレイを味わわれる始末。

すると、そんな雰囲気を感じてか、近藤が声をかけてきた。

「大丈夫ですか？ 夏ちゃん」

「これ以上、私を辱めてどうしようってんですか？」

「はい？」

「あ、いえ」

遊び心で決めた呼び名に、逆に弄ばれるという夏華。



「あの、気にしないでください。ちょっと弟の残念な嗜好に打ちひしがれていただけ　ってあれ？」

話しかけられ、顔を上げてる内にようやく気づく。

車が停まっていた。

長らく携帯と睨めっこしてたせいで、他に気が回らなかったようだ。

「ええ。着きましたよ」

まだ状況を上手く把握できない夏華に、近藤は言って聞かせる。

「そうでしたか。着くの、意外に早かったですね」

いつもとは違う体感での到着に、少しばかり呆気にとられていたすると、そんな夏華の耳にコンコンと、窓を叩く音が入ってくる。

振り向くとそこにいたのは、

「　母さん！」

窓越しに映る、優しい微笑を向ける女性に思わず大声を上げる。過剰に反応してしまったのは、嬉しかったから。何せ一月ひとつきぶりの再会である。

五〇の太台をとくに越えてる母はここ最近、老け込みが目立つようになっていた。単にたまにしか顔を合わせていないからそう感じるというのもあるが、それだけでない焦燥感というか、疲労が顔に滲みでている。彼女の立場からすれば、必然と言っておかしくない兆候であろう。けど、与える影響は何も悪いことばかりでもない。

本来であれば「もう後は死ぬだけよ」なんて達観した生き方をする齡だというのに、母の瞳は未だに生気が宿り、ギラついている。加えて、白髪であるはずの長髪を黒色に染め、小奇麗に束ねることで若々しさが醸しだされていた。風貌は、傍から見ると近寄りがたい威厳を放っているが、それもまた彼女の重責故のこと。

夏華は、車の扉を開けると外に飛び出した。そのまま、一目散に母へと抱きつく。一方、彼女の方も両手を広げ、受け入れる格好で抱き返した。そして、愛しむように娘の髪を撫でていく。

「元気にしていたか？　怪我は？　食事はちゃんと良い物を食べて

いるか？」

「はい。怪我もなく、元気にやってます」

親の心配に夏華は答えていく。さすがに最後の質問はスルーしたが、かといって酷い食生活を強いられる訳でもなし……毎日、お弁当も含め三食、手料理を振舞ってくれるのだから、その点だけ見ればむしろ健全だった。

「母さんの方は？」

言つて、今度は夏華が母の心配をする。間近で見る彼女の顔。少し頬がこけたであろうか。もう随分な齢だし、無病息災でいることの方が稀だ。

「もしかして、何かの病気にかかって」

「こおら、夏。勝手に私を病人扱いするな。今だってほれ、この通りピンピンしておる」

「本当ですか？」

「本当よ。あ、それはそうと、夏。話は変わるがな」

「会長」

親子の会話に割って入る、洪い男声。いつの間に外に出たのやら、近藤によるものだった。

「分かつておる。今言おうとしてた所よ」

「会長」と呼ばれた母が、近藤の声に応える。

「そうでしたか。申し訳ございません。無粋な真似を」

「いや。お前の心配は重々承知している。さすがにこんな所で立ち話など、正気の沙汰でないわな」

そう話す二人の会話を聞いてて、夏華は不思議に思う。

（こんな所？ 何で実家をそんな他人行儀な口ぶりで……）  
と思つた所で、辺りを見渡してみる。

ここは、高層ビル群の一部として屹立する建物だった。近代建築の極みを骨の髄までしゃぶつたかのような意匠が、至る所に凝らされている。下へ目を向けると大理石の床があり、左へ目を向けると、豪邸にありがちな円形の噴水が水飛沫を上げ、小さな虹を創ってい

た。

最後に、右へ目を向けるとあったのは、そびえ立つという表現がピッタリな丸型の巨大ビルディング。時が夕刻ということもあってか、茜色に染まったガラス窓の照り返しは弱く、おかげでその幻想的な美しさを直視できていた。

夏華はこの光景に見覚えがある。だから、ここがどんな所か知っている。だから、とんでもなくおったまげた。

「ってここは白道会の総本山じゃないですか!？」

たじろぐ夏華に、他の二人は動じない。

どう考えてもおかしかった。

ここは夏華の実家ではなく、白道会がその基盤を置いているビル。そして白道会とは、東関東最大の暴力団組織。華道会との対決姿勢を鮮明に打ち出している暴力団であり、つまりは、

「いやいやいや! どちらかというと二人の方が冷静でいられないのでは? だって二人は」

「だから、さっきの話に戻るのだがな、夏」

言って母が、夏華の喋りに割って入る。

そして、告げた。これまたとんでもない無理難題を。

「私の力になつてくれないか? この華道会と、白道会の架け橋に」

つまりは、華道花<sup>かどうはな</sup>。夏華の母は親であると同時に、華道会を牛耳る長でもあったのだった。

**第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会3】（後書き）**

投稿が遅れてしまい、申し訳ございません。キリのいい所がなくて中々の長文になってしまいました。

次回作は、近日中を予定しております。

## 第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会4】（前書き）

白道会の総本山である、丸ビルに乗り込む夏華達。その最上階にはあの人待っていて……

## 第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会4】

最近のエレベーターというものは、よくできている。

昔はガタンゴトンと、駆動音がしたものだが、夏華達一行の乗ったそれは静かだった。更には、外が見渡せるガラス張り仕様だった為、景色を満喫できるというサービス付き。ただ、底も含め四方八方が透明なのは、利用者によっては、恐怖のアトラクションに様変わりする危険性も孕んでいた。

夏華達三人が乗る上りエスカレーターは、あつという間に五階一〇階と、階を通り越していく。重力がかからないよう巧みに設計されたであろうが、それでも下に押し付ける圧力が、三人に降りかかった。微々たるものだが、確かな力。だというのに、当の夏華は微動だにしなかった。

というか、それどころじゃなかった。

（何でこんなことに何でこんなことに何でこんなことに何でこんなことに……）

自分の世界に引き籠もり、同じ疑問をループさせている。心の病み方が尋常でなかった。現実逃避とでも言っているのかもしれない。できるだけ後方にいる二人は見ないようにしている。そうすることで、少しでもここに居ることを忘れていたかった。

とはいえ、このままではいけないとも思ってしまう自ら。その、どこかに潜むちっぽけな良心が、状況を整理させていた。

（現在、白道会の本拠地に華道会の重鎮らがやって来てる。で、白道会と華道会といったら水と油くらいの敵対関係。これら二つから導き出される結論は？）

抗争、そんな言葉しか思い浮かばなかった。ならばと対抗策を練るうにも、この丸ビルに入った瞬間から、そんなこと考えようがないくらい切羽詰ってる。だだっ広いエントランスを一步踏み込んだ途端、「ああん！？」だの「てめええ！！」だの罵声が飛び、強

面の男達に飛びかかれてた。無論、一女子高生を襲うなんてことはなかったが、殴られそうになる母を見る娘というのは、精神上非常によろしくない。

即ち、ちよつとした抗争なら既に始まっていたのだ。

「近藤。最近のお前はたるんでおる。仮にも若頭なら、日々の鍛錬を怠るでない。動きが鈍くて、目も当てられなかったぞ」

「申し訳ございません。もう現場を退いて、五年以上は経つので」母と近藤が、何てことない会話をする。その彼のスーツは、おびただしい量の返り血で赤黒くなっていた。何せ迫ってくる白道会の組員を、丸ごとのしてきたのだ。正直、五人くらいまでなら数えられたが、それ以降はあまりの壮絶さに悲鳴ばかり上げていた。

おかげで、今の夏華はみつともないくらいにげっそりし、声はガラガラに嘎れている。

そんな、ぐったりした人間が考えることといったら、やっぱり愚痴だった。

「何でこんなことに何でこんなことに何でこんなことに何でこんなことに……というか私、ピチピチのセブンティーンウケル」とか『ホントにー?』とかガールズトークで盛り上がっているお年頃! 友達いないけど。先生に怒られるって分かってもスカートの丈折ったりして、膝上まで見せちゃう悪い女子なの! 怒られたことないけど。大体血って何血って! 血飛沫浴びる一七の女子<sup>イシズ</sup>って、どんだけハードボイルドだよ! 言うほど浴びてないけど」

心の中だけで呟いてるつもりが、知らず口に出てしまっている。精神の不安定ぶりが、如実に表れていた。何か後方で「くうっ!」といった、夏華を哀れむかのような男の涙声を聞こえる。こっちの方が泣きたいぐらいだった。

ついさっきの反省も踏まえ、今度こそ頭の中だけで思考を留める。(そもそも二人だけで白道会に乗り込むってどゆこと? 無謀もいいとこだし、向こうに殴ってくれと言ってるようなもの。今回は、

たまたま人気がなかったから良かったものの、もし普通の人ばかりがあつたら、いくら近藤とて無事では済まなかったはずよ）

刹那、エレベーターが停止し、夏華のうだうだも途切れた。見上げてみる。階は最上階である「三〇」を示していた。前方の扉が開く。

「さて、行くぞ」

華道花が、先頭を切って前に出る。釣られるように、近藤も出た。片や夏華は、ここで一階のボタンを押してエレベーターを閉める幸せを考えていたが、行動に移せるだけ勇氣は持ち合わせていなかった。

従つて、嫌々ながら前に出る。

この階層は一本道だった。三人は、赤のカーペットで敷き詰められた廊下を、ゆつくりとした足取りで進みゆく。途中、所々に設えられた照明器具は、通行者の歩みに合わせ光るセンサー式だった。加えて、放つ輝きは高級感を煽る、厳かなもの。

周りの雰囲気<sup>ひと</sup>に当てられたのか、夏華の表情は自然と引き締まったものになる。とはいえ、普段ここに来る時は、こんな緊迫した面持ちになどなりはしなかった。と、なるとやはり元凶は、前方の二人。

夏華が思ふことは一つだった。

（姉さん、きつと怒るだろうなあ……）

自然と、鞆を抱き込む両腕に力がこもる。それもそのはず。

元々下校した後、ここに足を運ぶ予定だったのだ。が、よもやこんな形であの姉<sup>ひと</sup>に会おうとは思つてもみなかった。

横幅のある回廊は、徐々にそのうねりを減らしていく。そして終に、突き当たりを迎えたのだった。

視界の先に佇むのは、木製に似せた両扉。

実は自動開閉式であるそれは、差し詰め様式美といった所である



う。

（あれ？）

夏華は不思議に思った。それは、普段と違っていたから。いつもならあの扉の両脇には大柄のガードマンが二人、張り付いてるはずだというのに現状、誰もいなかった。

（何で？）

「やはりか」

そうばやく母は、まるで何もかも見通してるかのようにだった。

「母さん。やはりって」

「夏。それはいいから、とりあえず先に入っておくれ。私からだ、何かと厄介なことになるからの」

夏華の訊きたそうな空気は無碍にして、母は本題に入っていく。一方、こちらとしては気にならないでもなかったが、あえて踏み込むほど野暮なことはしたくなかった。

故に夏華は、足並みを緩めた二人に代わって前へと出る。両扉の近くまで行くと、ウィーンという機械音と共に、扉が開かれた。その最奥では、馴染みのあの人が、黒革のソファ―ベッドに座って電話をしている。

齡は、二八歳。セミロングの髪を少しカールさせることで、愛らしさを演出している。それは強気で、どちらかというと男勝りな顔つきとはギャップがあり、だからこそ魅力的だった。細身の体にはシミ一つなく、すらっとした脚には、自然と目がいつてしまう美しさがある。

可愛いというよりは格好いい。

可愛いというよりは綺麗。

女っぽいというよりは男っぽい。

というか、

（うつわー。やっぱそっくり）

今朝、兄と一夜を共にした女性の外見と、全くと言っていいほど遜色がなかった。

そんな姉　加藤美麗<sup>みれい</sup>が、電話越し発する音声。  
初めに聞こえてきたのは、罵詈雑言だった。

**第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会4】（後書き）**

次回作は、近日中を予定しております。

第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会5】（前書き）

白道会が拠点を置く丸ビル、その最上階に来た夏華一行。突き当たりの部屋に入ると、そこには姉のイライラした姿があった。初めに耳にしたのは、誰かとの口論の様子。それは……

## 第一章 不確かな真実(うた) 【華道会と白道会5】

「だからウチは関係ないって言ってるでしょうが!! んなしつこいんなら奴さん、確たる証拠出せってーの! こちとら朝から、ウチの者達を出張らせてそれどころじゃないんですわ。ええ……任意同行? なら正式に逮捕状を取ったら、またおかけ直してください。それでは!」

ありつたけの皮肉を込め、姉は電話を切る。

「警察からか? 近いうちに、ガサも入るんじゃないかの」

その仕草に、声をかけるべきでない人が先手を打った。

喋りかけたのは、華道会の親玉。

夏華はただただ、天を仰ぐ。

(てか私という緩衝材は!?)

先頭に立っているというのに、でくのぼうな自ら。

そもそも場の雰囲気のを和らげる為、第一声は託されたばかり思っていた。夏華が間に入ること、少しでも双方がいがみ合わぬように、火花を散らさぬようにする心配り。少なくとも、その意図はあったはずなのだ。なぜなら、この丸ビルに入る直前、母は「華道会と白道会の架け橋になってくれ」といった趣旨の発言をしてきたのだから。

しかしながら、蓋を開けてみればこんな顛末。

先走りしやすい母の発言で、自分の立場は台無しになっていた。

後、夏華ができることといったら、所在無さに俯くくらいなもの。

(私の存在意義って一体……)

だったらどうして巻き込んだ! と嘆かずにいられない。が、そんなことお構いなしに、局面は張り詰めたものになっていった。

姉を見ると、下を向いている。その背後からはどうしてか、焰の如き激怒と大蛇の如き殺意が迸ってるように感じられた。不可視で

あるはずのそれらは、五感として捉えようがないはず。これは目の錯覚、もしくは自身の情緒不安定さからくる強迫観念に違いないと、そう結論付けていた。でないと、やっていけそうにない。

「あらあら。これはこれは……今日は珍客が多いこと多いこと。テレビなんて見る暇さえなかったけど、きつと今日の運勢は最悪ね」  
姉がこちらには視線を合わさず、冷戦の口火を切る。

「それは嘘よな。今日び、ニュースを賑わしてる東京スカイツリー崩落事件。それとの兼ね合いでお前さんとこの白道会は、引っぱりだかだっていうじゃないか？ 羨ましい限りだ。会長」

「お褒めに預かり光栄です。それに、何かとウチの者とも遊んでくれたみたいで」

と言いながら、近藤に目を向ける。途端、彼の全身がビクンと波打った。

（恐ろしい。恐ろしすぎる）

リアクション

あの近藤をもって、あの反応。蛇に睨まれた蛙といった所だろう。同じカモられる側の夏華にとっては、とても他人事ではない。

「それより、座ってもいいかね。老体に立ち姿はきついでの」

「冗談。お帰りを」

そう口にしながら、不気味な笑みを浮かべる姉。対する母も母で、笑顔を作ったまま歩みを進めると、彼女の向かいに鎮座する黒色のソファアーベッド、その膨らみに腰掛けた。結果、対面する形になる姉と母。

建前という名の仮面を被った殴り合いは、ここからが本番のようだった。

とりあえず夏華は、ここでじっとしていても埒が明かないので、渦中の二人がいる所まで歩いていく。近藤も右に同じくといった様子で、そそくさと同じ挙動を見せていた。

ここは東京都心に拠点を置く、白道会の会長室。

姉の好みからか、内装は白と黒を基調にした、シックな装束だった。目に付く物といったら本棚に机、他には接待用のソファアーが二

対あるだけ。

そんな質素さが目立つ一角で、激しく燃え盛る二人の鏢<sup>つば</sup>迫り合いが佳境を迎えていた。

「にしても、これまた大それたことになったわいね。今じゃどこもかしこも、この話題で持ちきりよ」

「生憎と、そんな無駄話ができるほど暇ではないんでね。単刀直入といきましょう。丸<sup>ウチ</sup>ビルにまで乗り込んできた用件は？」

「……何が狙いよ？」

「いやはや、東日本を統べる方とは、およそ見受けられない洞察眼ですね。白道<sup>ウチ</sup>会がやったと、そういう見立てですか？」

「それ以外なかるう。消去法よ」

「ならば、そちら以外考えられないのではないかと」

「何だと」

母は威圧しながらも、訝<sup>いぶか</sup>しげな表情をする。

「腹の探り合いなんて、する必要すらないのでは？ だってそうでしょう？ 塔をぶった切るなんてありえないこと、歌族<sup>かぞく</sup>の血統にある貴方<sup>あなた</sup>以外、誰ができるっていうんですか」

「私がやったと？ 何の為に？ あんなモタレ（三下やくざ）一匹を消すのに、わざわざ大仰なことはするまい。というか、私の血筋を受け継いでる者は他にもいる。お前があの冬冶<sup>おやひ</sup>をそそのかしてやった。そうではないのか？」

「あの男、ですか。自分の息子に対して、随分な言いようだ」

「奴はもう、華道家から勘当された身。私の子は夏だけよ」

「なるほど。ですが、彼の性格はよくお知りのはず。アイツが、歌を人殺しの道具に使うなんて、まかり間違ってもありえません」

「だから言っておる。お前が、そそのかしたんだと」

「これでは堂々巡りですね。まともな議論ができそうにない」

壮絶な舌戦は、じわじわと相手を追い込む、そんな女ならではのねちっこさがあった。

（歌族、か。やっぱりそこに行き着くのね）

二人のやり取りを聞きながらに夏華は、この血族について少しばかり考えさせられていた。

歌族とは、古くから華道家に脈々と受け継がれる、特殊な血統を持つ家系のこと。それは歌うことで、そこに込められた詞ことばを現実反映させられるという、異能が揮える家族だった。

即ち、その力はあまりにも人外で且つ、持て余すもの。

現に夏華が真つ二つにした東京スカイツリーも、その異能によるものだった。それだけの凶悪さ故、幼い頃から歌うことは、いけないことだと教えられてきた。殊今に至っても、歌うことは学校も含め、決してはいけないことだと厳しく戒められている。

「歌族というのはな、部外者が一朝一夕で理解できるようなものではないのだよ。古よりその家だけに受け継がれる、由緒ある血統故の、掟と枷。それらなぞ、お主の与り知るところではあるまい？ 軽はずみな発言はやめなされ」

と蔑む母に対し、姉の切り返しは博識だった。

「『掟』というのは、決められた年齢までは歌ってはいけないとする決まりでしょうね。現代では、その境目が二〇歳はたちに上げられてること。で、『枷』というのは申刻まめときの縛ばくのことでしょう。確かあれが発動するのは、異能を使ってから二日後。と、なると、あの縛りに苦しめられるのは、明日の午後四時にあたる。あ、でも、冷酷非道なあなたには関係ない話でしたね。御免あそばせ」

二人の対話は、段々と内輪のみぞ知る世界へと、様相を変えていく。聞き手に回ってる夏華としては、何を言ってるかさっぱりだった。



**第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会5】（後書き）**

次回作は、来週の水曜日以降となります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9099w/>

---

歌の力～混沌に咲く絆（はな）～

2011年10月10日03時23分発行